

孫文研究と宮崎家文書——久保田文次氏訪談録（上）

まえがき

（同志社大学）村田 雄二郎

本稿は辛亥革命史及び孫文の研究者として知られる久保田文次日本女子大学名誉教授へのロングインタビューを上下二回に分けて連載するものである。インタビューは「東京大学現代中国研究拠点」（代表：丸川知雄）内に置かれた「世界の中国研究」班（班長：谷垣真理子）による研究活動の一環として企画され、村田雄二郎が聞き役となった。

この「世界の中国研究」班は、台湾国立政治大学の石之瑜教授を中心とする「世界の中国研究」プロジェクトとも連携し、日本のみならず、香港など中華圏におけるオーラル・ヒストリーを展開することを計画している。「石プロジェクト」による戦後日本の中国研究者へのインタビュー記録の一部は、すでに『インタビュー 戦後日本の中国研究』（平野健一郎・土田哲夫・村田雄二郎・石之瑜編、平凡社、2011年）となって公表されているので、関心のある向きは参照されたい。

本インタビューは、上記「石プロジェクト」の趣旨を受け継ぎ、戦後日本における孫文・辛亥革命史研究をめぐるオーラル・ヒストリーを試みたもので、中国の改革開放初期における日中学術交流の具体的状況、また宮崎滔天・龍介父子の個人資料を含む宮崎家文書の概要を親しく現場で見てこられた久保田氏から、当事者ならではの精彩に富んだお話をうかがうことができたのは幸いである。辛亥革命70周年記念シンポジウム開催の舞台裏や宮崎家文書の来歴を語った箇所などは、他の

文字資料では知りえぬ貴重な証言となっている。

なお、久保田氏の略歴は以下のごとし。1936年山梨県生まれ。55年東京教育大学文学部史学科入学。59年東京教育大学大学院文学研究科修士課程入学。61年東京教育大学大学院文学研究科博士課程入学。67年同課程退学。69年日本女子大学文学部専任講師。助教授、教授を経て2005年退職、日本女子大学名誉教授。同年、山梨県立大学国際政策学部長・教授就任。09年退職。なお氏の年譜と著作目録については、「久保田文次教授略年譜・著作目録」（『史艸』第46号、2005年11月、1-12頁）を参照のこと。

原稿の整理にあたっては、古谷創氏の協力を得た。記して謝意を表する。

* * * * *

日時：2017年10月31日（火）13時～17時

場所：東京大学駒場キャンパス18号館4階会議室

辛亥革命研究までの道のり

Q：東洋史、中国史研究を志した経緯をお聞かせください。

私は、1955年に東京教育大学文学部史学科東洋史学専攻へ入学しました。入学当初は高等学校の地理・歴史の教員を志望しており、そのための入学先として東京教育大学を選びました。ただ、最初は中央アジア・西アジアに関心がありました。卒業論文は、新疆のイスラム教徒反乱とその背景である農業問題について書き、修士課程修了までこのテーマで研究していました。中国プロパーに関心を移したのは、博士課程以降のことです。

博士課程進学後も、当時の私は史的唯物論の流行に乗っていましたから、まず下部構造を固めてから上部構造の研究に移る考えを持っていました。中国史をやる場合でも、社会経済史から始めるんだということで、四川省における社会経済史を研究テーマに選びました。ご存知のように、四川省は「天下に先んじて乱れ、天下に後れて治まる」地域でして、辛亥革命の導火線となった鉄道国有化反対運動（保路運動）が起こったところです。

私の論文のタイトルに「辛亥革命」が入ったのは、1969年の「辛亥革命と四川省」が最初です。ただし、これは社会経済史の視角から書いた論文でした。初めて政治史、革命史を意識して書いた文章は、1970年に『史学雑誌』に載った「1969年の歴史学界—回顧と展望—」です。

きっかけは、尊敬していた野原四郎さんの書かれた論文への違和感でした。野原さんは、義和団運動を高く評価した日本人の文章を見つけられ、その筆者がどういうグループに属するかを考察されていました。そこでは、孫文がかつて義和団を「無知蒙昧な愚民」だと批判したことがあったことから、孫文派以外のグループが推定されていました。つまり、最初から孫文派の可能性を排除していたわけです。この時の私は、孫文や辛亥革命の研究を始めてはいなかったのですが、北一輝の『支那革命外史』や宮崎滔天の『三十三年の夢』を愛読しており、野沢豊さんの引かれた関連論文にも目を通していました。確かに孫文は、一面では義和団を無知蒙昧だと批判していました。ですが同時に、義和団は中国分割に抵抗する民族精神を体現するものである、もし彼らが無知蒙昧から脱して近代的な思想と武器を持って抵抗するならば、必ず列強の心胆を寒からしめるだろう、という趣旨のことを書いていました。それから、横浜で発行された雑誌『開智録』は義和団を評価した論文を掲載しましたが、その雑誌に孫文は補助金

を出しています。発行メンバーは孫文に近い興中会系のグループでした。野原さんは『開智録』を紹介されながらも、こうしたことに触れずに、孫文派ではないという推論をされていました。

そこで私は、この論文の批評を「回顧と展望」で書き、それに基づいて『義和団は中国に功ありの説』の筆者をめぐって」を書きました。「回顧と展望」のときは、いわば第三者的な立場でしたが、この文章のときには、わたしは論争の一方の当事者になっていました。それから、色々な史料に当たっているうち、どうも大先生と呼ばれる方々でも、基本的な文献を読まずに孫文を評価していることがあるようでした。これはちょっとおかしいじゃないか、ということから、次第に孫文及び辛亥革命研究へと研究の軸足を移すようになっていきました。

辛亥革命研究の背景

Q：久保田先生が博士課程に進学された1961年は、大陸で辛亥革命研究の新しい潮流が生まれ始めた時期と重なります。こうした潮流との関連についてお聞かせください。

61年のころは特に影響を受けていません。71年の辛亥革命60周年を記念した書籍や論文集が、私にとってはいちばん役に立った最新の動向です。中国書籍を専門に扱う書店はいくつかありましたが、私は主に大安書店で入手していました。もちろん、ご存知のように、その数年前から発生した文革の影響で中国における研究は停滞している状況でした。それでも、『民報』の復刻版が台湾で出ていましたから、研究しようと思えばできました。少し後になりますが、小野川秀美さんが中心となった、京都大学人文科学研究所の『民報』の索引や研究も大きな手がかりになりました。

本格的に私が中国の学界や研究者との関わりを持ったのは、1978年以降のことです。今から考えると、79年の訪中が私の中国研究の中では非常に

大きな意味を持ちました。これについては後ほど詳しくお話しします。

Q：大学院時代の勉強について、他大学の研究者との交流はどのようなものだったのでしょうか。

東京教育大学では近代史の講義はありませんでしたが、当時助手だった野沢豊さんが学習指導をしてくれました。野沢さんが『思想』（396号、1957年6月）で孫文の研究動向をまとめた際に、他の仲間と一緒に目録作成を手伝ったことがあります。野沢さんは非常に親切な方で、われわれ学生がサークルを作るときにも面倒を見てくれました。これが後から考えると、辛亥革命研究会の母体となったように思います。

私はそのとき教育大の寮に住んでいましたが、同じ寮に同学年の小島淑男さんが、一学年下に鈴木智夫さんがいました。修士1年の時(1959年)に、この3人が集まって読書会を開き、『中国近代農業史資料』『中国近代手工業史資料』などを読みました。そのときには野沢さんは参加していませんでしたが、その紹介もあって様々な方と出会うことができました。田中正俊さんはその1人で、田中さんを通じて衛藤藩吉さんとも知り合いました。衛藤さんといえば、その当時は「保守反動」と呼ばれていた人ですが、田中さんとは一高以来の親友であり、私は不思議と可愛がってもらいました。衛藤さんと出会えたことは、1981年以降、私が国際学会に積極的に参加するきっかけになりました。

Q：「保守反動」に関連して、1962年に東洋文庫がアメリカのアジア・フォード両財団から助成金を受けたことが問題になりました。そのときに印象に残ったことがあれば、お聞かせください。

引き金になったのは京都の小野〔信爾〕さんの論文ですが、東京でいちばん熱心に反対されていたのは、石田米子さん、近藤邦康さん、西川正夫

さん、丸山松幸さんといった東大東洋文化研究所の助手クラスの方々でした。わたしもアメリカの資金で現代中国の研究を行い、しかもそれが政策決定に繋がることには反対だったので反対運動に参加しました。東京での事務局は野沢さんの研究室におきました。ただ、われわれ教育大グループは、〔助成金受入を推進した〕市古宙三さんの本意は、近代中国研究の劣悪な研究条件を改善しようというところにあったと理解していたので、その心は是とすべきだと考えていました。その上で、研究体制や図書館の開放といった問題についても議論を深める方向に持っていこう、という立場でした。当時の教育大は蔵書ではかなり恵まれていましたが、それでも東大や京大との格差は絶大でした。京大人文研では小野和子さんや狭間直樹さんのご厚意で気持ち良く利用させてもらいましたが、東大東文研は館外閲覧者を想定しないようなシステムで、不便が多かったです。それで、研究体制の問題をも重視したのですが、東大や京都のラジカルな方々からは、「二流帝国主義」と批判されてしまいました。

そもそも市古さんには、東洋文庫の研究会で大変親切にしてもらっていました。正直なところ、市古さんを批判するのは本当に気が引けました。それで田中正俊さんにも相談したところ、「その通りだ。市古先生の肩をたたいたり、背中をさすってあげたりするような気持ちも必要だ」とおっしゃいました。私たちの気持ちも大体そういう感じでした。同時に、教育大でも姫田光義さんや多田狷介さん、小林一美さんたちは熱心に反対していましたから、私も板挟みにあって辛かったわけです⁽¹⁾。

いまから振り返れば、当時の市古さんは非常に紳士的でした。私が覚えているのは、市古さんを明治大学に呼んで説明を求めた会がありました。吊し上げてやろうと意気込む人たちがいる中でも、市古さんは悠然として終始冷静に対応されて

いました。この様子を見たのか、京都から来たと感じる人たちが、「どんな悪い奴やと思ってたら、意外に紳士のやないか」とトイレで話しているのを耳にしました。いまだからお話しますが、運動が一段落したころ、私は池袋で市古さんと会食したこともあります。

実は市古さんは、安保反対（1960年）や、空母エンタープライズの佐世保寄港（1968年）のときは、お茶の水女子大のデモ隊の先頭に立って運動するような方でした。勤務校のお茶の水女子大学は教育大近くにありましたので、デモのときにはよくご一緒することがありました。「保守反動」という評価は市古さんの場合、当たらないと思います。

Q：辛亥革命研究会成立の経緯について、もう少し詳しくお聞かせください。正式な成立年はいつでしょうか。

正式な成立年についてはちょっと覚えていません。次第次第に拡大していったという感じです。最初は、先ほどお話ししたとおり、鈴木智夫さんと小島淑男さんと一緒に江南の地主制の重要史料を読み始め、そこに野沢豊さん、中村義さん、藤井昇三さんが加わり、さらに田中正俊さん、山根幸夫さん等徐々にメンバーが増えていったわけです。重要史料とは鈴木さんが発見された『租覈』のことです。

ほぼ定期的に会が開けるようになったのは、1969年に私が日本女子大学の専任講師となって、会場が確保できるようになってからです。運営は藤井、中村、小島の皆さんと私が相談してあたり、重要事項は野沢さんに相談しました。藤井・中村・小島の皆さんと久保田は中国の友人達から冗談で「四人幫」とよばれるようになりました。それから、1981年3月からは辛亥革命研究会で『辛亥革命研究』という雑誌を出しました。基本的に、私の退職まで日本女子大が会場になりました。こ

の頃には研究会の企画や実務には飯島渉さんの大きな協力がありました。2005年の退職のときには続行の可能性も探ったのですが、山梨県立大学の管理職として東京を離れることになり、女子大との連絡が取りにくくなってしまいました。女子大の職員には親切にしてもらっていて、施設の使用・借用が私との個人的要素に頼る部分が多くなっていました。それをそのまま他の人が引き継ぐわけにもいかず、「始めあれば終わりあり」ということで解散に至りました。

この間、1991年には野沢さんからの寄付金もいただき、日本女子大学を会場として辛亥革命80周年記念の国際学会を開きました。中国大陸からは呉雁南、劉望齡、饒懷民、桑兵の諸氏、台湾の黃自進氏、劉碧蓉氏、韓国の金衡雲氏をお招きし、国内からも野村浩一氏、中村哲夫氏、山田辰雄氏、森悦子氏、山室信一氏、横山宏章氏や、当時若手の錚々たる方々の報告を頂きながら、論文集も出版せず、『辛亥革命研究』発行自体も中止になってしまったのは、全く私の無能・無為のためであります。この場をお借りして、報告者、参加者の皆様方には遅ればせながら、心からお詫び申し上げます。

辛亥研を続けていたお陰で、国内の研究者や院生が集まり、大学を越えた繋がりができました。中国の研究者が訪日すると、彼らに対応する役目が回ってきました。当時の東京大学には後に田中正俊さん、佐伯有一さん、小島晋治さんがいらっしゃる前は古島和雄さんしか近代史の先生が居られなかったこともあり、辛亥研が近代史の研究者の受入先になりました。それから、京都や神戸で招待した研究者が東京に来るときにも、辛亥研で対応を頼まれることになりました。そういうわけで、勢い中国の研究機関や研究者との接触が増えていきました。向こうの『辛亥革命辞典』にも、「辛亥革命研究会」が項目として収録されるようになりました。

そういう恩恵を受けたことが、79年という私にとっての重要事件と密接に関係があるわけです。

79年という契機

Q：先生の初訪中はいつでしょうか。

それがつまり、79年なんです。78年に中国共産党で改革開放の道筋がつけられましたが、それまでは日本社会党や日本共産党（文革以前）、自民党の親中派の力を借りなければ中国には行けませんでした。国交正常化以前に訪中した野沢豊さんが、給料1ヶ月カットの処分を受けるような時代でした。わたしはそのいずれにも与することがなかったために、訪中の機会がありませんでしたが、78年以降にはそうしたハードルがなくなりました。実質上、観光目的で、友好参観団という名目で中国に行けるようになったんですね。それで、一生に一度くらいは行ってみようという気持ちで、友好参観団の団長として参加しました。

そのときは、香港経由で入り長沙の農民運動講習所、井岡山、吉安、南昌といった、「革命の聖地」を見学しました。一緒に行った人たちは文革礼賛、紅衛兵かぶれの人が多かったので、農村の想像以上の貧しさに失望を隠せないようでした。私も文革当初は共鳴していた点もありましたが、物質的な豊かさには期待をしていなかったのも、そう落胆はしませんでした。それでも、田舎の家ごとに裸電球が灯っているのには感激しましたし、長沙から広東へ行く列車と雲南や貴州方面へ行く列車がすれ違うのを見て、交通状況の改善を実感しました。そういう新中国の建設の一面も目にしたわけです。

Q：79年が先生にとって重要な契機とおっしゃる理由について、詳しくお聞かせください。

1979年は、2、3の中国の研究者との出会いがあった年でもあります。これが、その後の私と中国との関わりにとって非常に重要な意味を持ちま

した。

劉大年さん

一人目は、中国社会科学院近代史研究所の名誉所長だった劉大年さんです。この歴史学界の大御所が1979年に東大の客員教授として来日されたとき、私も田中正俊さんの勧めでほとんど欠かさず講義に出席しました。この過程で濱下武志さんや岸本（中山）美緒さんを始め、東大の院生諸君とも親しくなりました。

実は劉大年先生は、1963年にも学術代表団の一員として来日しており、東京教育大でも講演をされていました。そのとき私は大学院生で、京都の小野信爾さん達が提唱された中国学術代表団招請運動に積極的に協力しており、教育大の歓迎委員会の事務局次長をしていました。当時、新中国に心酔して中国の近現代史について卒業論文を書いた人たちの中には史料の厳密な読解を重視しない傾向がありました。そうした傾向に疑問を持っていました。

劉大年さんが教育大で講演をしたときのことで。劉さんはかつて中国共産党の宣伝機関に所属しており、研究も職務としていました。そのとき、史料を大事に扱った例として、ロバに積んで各地を転戦したという昔話を披露してくれたのが非常に印象に残りました。「やっぱり史料は大事だぞ」と仲間内に話して回ったくらいです。

それで、せっかく劉大年さんがいらしたことで、教育大で学長主催の昼食会を開催したいという提案をしました。学長は私の高校の先輩でしたから、私が掛け合いに行きました。東大でも早稲田でも「総長会食」をするそうだからやってくれないかと頼むと、「東大は東大、教育大は教育大だ」と断られてしまいました。当時は日本と中国に国交がありませんから、その辺りを気にしたのだと思います。ただ、学長の参加はかないませんでした。が、学部長クラスの参加は認めてくれました。

昼食会に参加した教員の中にはノーベル賞受賞者の朝永振一郎さんもいて、劉さんは大変感激していました。劉さんとはそもそもそういう御縁があり、79年の再会以来、大変可愛がってもらいました。

何より感激したのは、私が中国プロパーを研究するきっかけとなった野原・久保田論争を事前に知っておられたことです。劉さんは関連史料を用意して持参され、私寄りの立場から2人の仲を調停してくれました。81年に訪中したときに分かったのですが、近代史研究所の中には日本語や外国語の研究を翻訳する研究員がいて、『国外中国近代史研究』という定期刊行物が出ていました。劉さんは日本語もかなりお読みになりましたが、これを通じて論争の中身を把握していたようです。

劉大年さんのお相手をする中で、後に私の研究に大きく関わる出来事がありました。劉さんから、東京・横浜・鎌倉にある辛亥革命の関連史跡を歩いてみたいという希望を出されたことです。最初は困りました。専門家でも、史跡がいまのどこに当たるかはご存知ない方が多かったのです。以前そういうことを調べていた早稲田大の小川博さんのところに行きましたが、それでも分からないことがいっぱいありました。それで、史跡の所在地を調べ始めたわけです。当時の住所を現住所と対照させながら場所を一つ一つ特定していきました。幸い新宿区で史跡の多い旧牛込区の部分は町名と番地が全面変更される前で、大変調べやすかったです。もともと地理・歴史の教員を志望していたこともあり、地図が好きだったことも良かったのだと思います。劉先生が見学に行きたい時期までには、基本的なところは何とか絞り出せて、ご案内することができました。このとき、中国同盟会結成の地である旧坂本金弥邸（現オークラホテル内）の場所も特定しました。これを契機に、日本における辛亥革命関連の研究にも興味が出てきました。

この時先生が東大の講義をまとめられた『赤門談史録——論辛亥革命の性質』（1981年）は、中国の歴史学界にとっては復興・再建の象徴的存在でした。私にとって良かったのは、その中の「横浜東京孫中山遺跡訪問記」の冒頭で「久保田文次」という名前を紹介されたことから、中国での認知度が高まったことです。

黎澍さん

近代史研究所副所長の黎澍さんとの出会いもありました。非常に開明的で、柔軟な考え方を持った方でした。東大の明治新聞・雑誌文庫をご案内したときのことです。明治新聞・雑誌文庫では、辛亥革命当時の雑誌を見せてもらいました。その中で、『太陽』に黄興の写真が載っているのを見つけれ、「彼はとても勇敢な人です」（他是很勇敢的人）と感動したように話されたのを覚えています。その時思い出したのですが、79年に訪中したときに、長沙の岳麓山にある黄興の墓参りを希望したことがありました。ところが、ガイドもその場所を知らないんですね。地元の人たちに聞いてみましたが、彼らもよく分からない。

そうしたことがあったものですから、黎澍さんが黄興を評価されたことに感動して、黄興の墓の話をしてみました。黎さんはそのことを覚えていて下さいました。私が81年に2度目の訪中をしたときには、黎さんが紹介してくれまして、北京で黄興の子息である黄一中に会うことができました。その時、鶴見総持寺の黄興記念碑の状況を訊ねられましたので、「目下、松本武彦さんに調べて貰っている」とお答えし、帰国後、松本さんに教えていただき、現地で確認しました。これが機縁で末弟の黄乃さんともお知り合いになりました。

中国研究者を取り巻く大環境

三人目の章開沅さんの話に移る前に、ここで日

本の中国史研究者を取り巻く大環境についてお話ししておきます。当時の私たちは野沢さんの影響もあり、またもともとに関心もあり、資本主義の面から、あるいは経済的な面から辛亥革命を理解しようとしていました。その一方で、1980年代前半ころまでは、人民闘争中心史観が大きな影響力を持っていました。

私たちは、人民闘争を中心にして歴史を捉えることにはもとより異存はありませんでした。それは当時の我々にとっては当然の、常識的なことだったのです。しかし、同時に経済的条件にも目を向けなければならないと考えていました。これも「唯物史観」からすれば当然です。菊池貴晴さんが指摘されたように、中国ナショナリズム運動、例えば利権回収運動も、資本主義の勃興に対する期待から生じた面がありますし、農民闘争にも経済的側面があります。そうした両面から歴史を見なければならない、というのが私たちの立場でした。

ところが、後で都立大〔現・首都大学東京〕に移ってきたもと京大助手の里井彦七郎さんが非常に議論を単純な二項対立にしてしまいました。里井さんは、資本主義の発展や経済条件をも重視する立場を「資本主義派」と名付け、人民闘争を重視する立場と対比させ、「人民闘争派」に軍配を上げることをしました。

もともと野沢さんと里井さんは、意気投合し合う同志のような間柄でした。しかし、野沢さんは「資本主義派」というレッテルを貼られましたから、里井さんが都立大に移籍した後は関係がギクシャクしてしまったようです。あくまで私の想像ですが、里井さんご本人としては、自分が野沢さんよりもラジカルな存在になって、東京の「ガラ幹」（墮落した、あるいはだらけた組合や政党の幹部）たちを鍛え直す意向だったようです。

後になって思えば、「人民闘争派」か「資本主義派」か、という二項対立のレッテル貼りは、「百

害あって一利なし」でした。レッテル貼りは、便宜的な面で使うならまだしも、あの時代に「資本主義派」と名指されるのは、文革期であればとんだ災難を受ける運命に置かれることを意味します。

章開沅さん

章開沅さんの話に移ります。章さんは京都学術交流懇談会の招聘を受け、79年11月に来日されました。私たちは華中師範学院〔現・華中師範大学〕で発表された論文から、章さんが資本主義の発達を非常に重視する立場の学者だと言うことを承知していました。「資本主義派」という不毛なレッテル貼りに嫌気がさしていた時期に、そうした方が来日されたことは、私にとっては100万の援軍を得たような思いでした。当時外国へ派遣される学者は「大物」が多かったので、資本主義を重視する章教授が大物として評価されているということも嬉しいことでした。

章先生について少し述べておきますと、非常にユニークな人なんですね。近刊の『章開沅学術与人生』等ご自分の著書の中で平気で「自分は文革で農村に下放されたときでも、右派と目された人たちと協力してうまくやった」とか、「アメリカに行ったとき、柴玲〔天安門事件の学生指導者〕たちと一緒に食事して『頑張って勉強しなさい』と激励した」とか書くような人です。ですから、他人から「資本主義派」と批判されても屁とも思わない。この本は最近読んだのですが、そうした傾向は前から感じていましたから、そういうところにすっかり惚れ込んでしまったわけです。

そんな章さんが東京にいらっしゃいました。私に連絡して下さったのは石田米子さんでした。11月10日に佐伯有一さんと私が世話人となり、10名くらいの人に集まって貰い、懇談会を開きました。東京でも章先生を熱烈に歓迎する人たちはいましたが、その専門分野を評価した上で歓迎

できる人はあまりいませんでした。自然とスケジュールにも空きが出てきます。次の日には東京を離れるという日に、私は単独でも会おうということで、章先生のホテルに電話をかけました。突然で、仲間との連絡調整のための時間的余裕もなく、不確定要素の多い計画だったので、単独行動となったわけです。

慣れない中国語での会話ですので、伝えられるのは「明日暇があるか」「暇があったら2人でお話したい」の2つだけです。その上で、「イエスカ、ノーカ」です（笑）。「イエスだったら、通訳と場所を手配する」と言ったら、章先生は「イエス」と答えました。そういう、シンガポール攻略戦での山下・パーシバル両将軍みたいなやり取りがありました。

それで、通訳を見つけて家内の博子と娘も連れて行き、椿山荘の中の離れを借りて会いました。少し贅沢すれば貸し切りができる場所があったんですね。そこで一席設けて、肝胆相照らすことになった次第です。章さんの日記によると、79年の11月13日のことでした。

これが章さんとの長い付き合いの始まりでした。83年に博子が宋慶齡の調査に出かけたときにも、章さんが骨を折ってくれたお陰で北京の宋慶齡基金会との関係が生まれました。そして、これが最近になって宮崎家との繋がりを呼び込んだわけです。

辛亥革命70周年記念シンポジウム

Q：81年の辛亥革命70周年記念シンポジウムについてお聞かせ下さい。

79年には画期的な出会いがあり、これが機縁になって、81年の辛亥革命70周年記念シンポが企画されることになりました。いま、手元にある「趣意書」（「辛亥革命と国際関係」に関する東京国際会議趣意書）から読み取れることを述べてみます。

準備委員会は委員長の有沢広巳氏（東京大学名誉教授）を筆頭に、委員と運営委員会代表に分かれていました。その顔ぶれは次の方々でした。

辛亥革命七十周年記念東京国際学術会議準備委員会

委員長 有沢広巳（東京大学名誉教授）

委員

井上清（京都大学名誉教授）

市古宙三（中央大学教授）

貝塚茂樹（京都大学名誉教授）

河野健二（京都大学教授）

桑原武夫（京都大学名誉教授）

斉藤秋男（専修大学教授）

島田虔次（京都大学教授）

東畑精一（東京大学名誉教授）

林健太郎（国際交流基金理事長）

増田四郎（日本学術振興会会長）

山本達郎（東方学会理事長）

古島和雄（現代中国学会代表幹事）

運営委員会代表

安藤彦太郎（早稲田大学教授）

衛藤藩吉（東京大学教授、アジア政経学会理事長）

小野信爾（花園大学教授）

久保田文次（日本女子大学教授）

佐伯有一（東京大学教授）

田中正俊（東京大学教授）

中村義（東京学芸大学教授）

藤井昇三（電気通信大学教授）⁽²⁾

前者は名誉職、後者は実働部隊という感じでした。実働部隊の中心となったのは衛藤さん、安藤さん、佐伯さんでしたが、安藤さんと佐伯さんにはその下で働く人がいない。実質的には衛藤藩吉さんがリーダーシップを取り、衛藤さんの親友である田中正俊さん、田中さんの親友の野沢豊さんがそれに協力する形になりました。そして藤井昇

三さんや野沢さん傘下の私たちや、田中ゼミの濱下武志さん、中山（岸本）美緒さんが、事務局レベルに入りました。このほか、同じ年の武漢会議に参加することが内定していた市古宙三さんも、委員・運営委員会代表にそれぞれ名前を連ねています。

東京シンポは81年10月21日に開催され、翌22日に『日本経済新聞』がこのことを大きく報じています。見出しには「『辛亥革命70周年学術会議』開く」「台湾の学者欠席」「国共合作を巡る複雑な動きが波及」とあります。以下、記事の一部を読み上げます。

二十一日からの会議は日本の中国研究者で構成する準備委員会（委員長・有沢広巳東大名誉教授）が主催している。海外からは、胡繩北京大学教授、陳錫祺中山大学教授ら五人の中国人学者をはじめ、米国、フランス、イスラエル、セネガル、韓国、シンガポール、ソ連などからあわせて十五人の中国研究者が参加している。

会議の準備過程では、台湾からも招待に応じて李守孔台湾大学教授など五人の出席が決まり、中国と台湾の学者が同席する国際会議が東京で実現するものとして注目されていた。だが、九月末、台湾側は不参加を会議の運営委員会代表の衛藤瀋吉東大教授に通告したため、結局、台湾学者抜きでの開会となった。

台湾側の欠席の理由は①台湾側が受け取った会議の趣意書には台湾を「中華民国」と明記していたのに、日本国内で配布した趣意書には「台湾」となっている②準備委員に加わっている親中国団体の責任者の名前が台湾側に送られた趣意書には記されていない——などというもの。

台湾の日本における出先機関、亜東関係協

会の張超英スポークスマンは先週の記者会見で、今回の会議を「北京当局の統一戦線工作の一端を担う悪質な試みである」と非難していた⁽³⁾。

このように報道されました。実は、この件が壊れたのにはもう一つ理由があります。準備委員会の事務局長をやっていた光岡玄さんという人がいました。この人は東亜同文書院出身で、辛亥革命研究会にもよく顔を出しており、宮崎家とも関係が深く「滔天会」（宮崎滔天を顕彰し研究する団体で、活発に活動中。代表世話人は滔天の孫娘にあたる宮崎露夢^{（きよむ）}）でも活躍していた人です。この人はむしろ、台湾側に送った資料に「中華民国」という国名が使われていたことを問題にしました。これは「二つの中国論」を認める陰謀だということで、事務局長でありながら、そのことを暴露・告発する文章を関係者に送りつけてしまいました。そうしたこともあって、9月末に台湾側の不参加が決まったわけです。台湾側の事情も補足すると、中央研究院や行政院系統は参加を容認する姿勢だったようですが、国民党の方で難色が強かったように感じます。

それから、2011年の辛亥革命100周年記念シンポでは、基本的にはアカデミズムの内部で企画・運営がなされました。しかし、1981年には後援団体として、「読売新聞社」、「日本テレビ放送網」が加わっていました。私の持っていた準備会の記録とメモによると、非政治的・純学問的・国旗の不使用を条件に、読売新聞社と日本テレビが2000万円提供することになっていました。彼らには、大陸と台湾の学者が一堂に会する場面を独占中継するという思惑があって、私も期待をかけていましたが、台湾側の不参加でそれも幻に終わりました。「感激の初対面」の舞台は孫文に所縁の深い日本からアメリカに移されてしまいました。

Q：その他の海外研究者についてのエピソードがあればお聞かせください。

もう少し後の話になりますが、野沢豊さんと田中正俊さんの『講座 中国近現代史』（1978年）が編集されたときのことです。私は第三巻の『辛亥革命』を担当し、総論「辛亥革命の理論と実際」と論文「辛亥革命と帝国主義——孫文・宮崎滔天の反帝国主義思想について」を執筆しました。当時、中国と親しい研究者の中では、台湾やアメリカの研究を重視しない、あるいは参考文献に挙げないということがありました。ですから、総論に関しては、台湾と英語の研究をなるべく取り上げよう意識しました。この姿勢を評価してくれた人が2人いました。1人は、韓国の閔斗基さんです。私の総論の注記・参考文献をご覧になって、非常に高く評価してもらえました。もう1人は、当時は東大の博士課程の山名弘史さんです。「先生の担当された巻は、最もセクト主義的色彩が薄いです」と葉書に書いてくれました。

こういう風に、親中国的な人や「進歩的な」人の間には、台湾やアメリカの研究にあまり敬意を払わない、払いたくない、そういうムードがありました。このことを念頭に置いていただきたいと思います。

アメリカの研究者については、メアリー・ライト〔Mary C. Wright〕さんや、マーティン・バーナル〔Martin Bernal〕さんの書評を書きました。趣旨には賛同しない点もあって、今から見ると生意気な、間違いを多く含んだ書評でしたが、アメリカの研究動向は絶えず注意を払っていました。ドン・プライスさんは古い友人でしたから、英語の文献にも注目していました。

台湾の研究者については、張玉法さんや、張朋園さんの研究に注目していました。彼らとも80年代以降には国際学会でお目にかかることができました。大陸や台湾との交流では山田辰雄さんのお世話になったことが多いのです。

台湾との関連で、『文物』編集長だった金沖及さん（後に中共中央文献研究室）の話もしておきます。金さんとは81年の中国・日本での国際学会で親しくさせていただきました。いつも気さくで明るい方です。金さんが82、83年ごろに、日本経済新聞社の招待で日本へ来たときの話です。当時の『日本経済新聞』は西域もの、図録もの、文化財ものをたくさん出版していましたから、文物出版社とは縁が深かったという事情がありました。

それで、金さんと野沢さんが日本女子大の近くで会う話になり、私も同席することになりました。ところが、野沢さんは当日に体調不良になり、私が対面で金さんをお相手しました。そのときの金さんは、かなり本音を吐露していました。「わが国は10年の動乱〔文化大革命〕のお陰で研究も何もかもが遅れてしまった。この間に台湾は、驚くべき経済発展を遂げた。研究面でも、張玉法や張朋園のような立派な人が出ている。この2人の張先生に会うために今すぐにでも飛んでいきたい」と、涙を流さんばかりに訴えるんですね。文革が全面的にまずかったという話を、高名な研究者からおおびらに聞いたのは初めてのことで、中韓接近の展望もお聴きしましたが、当時は野沢さんにも話ませんでした。

その前にお会いした劉大年さん、黎澍さん、章開沅さんは文革の受難者でしたし、この方たちは文革のことをあまり話題にしませんでした。聞く方もはばかりれるし、答える方もあまり話したくなかったでしょうから。文革否定の歴史決議は1981年のことでしたが、生々しい本音をお聴きしたのは初めてでしたので、金さんの話は非常に衝撃的でした。東京シンポが当初の予定通りに行われ、中台学者の初対面が実現していれば、その感激はいかばかりだったか、と思います。

こういう機縁が広がる中で、81年に東京シンポの準備と武漢シンポの参加があったわけです。

1981年の武漢シンポジウム

Q：81年の武漢シンポジウムについてもお聞かせください。

結果の方から先に申しますと、10月にまず北京から入国し、武漢でのシンポに参加した後で広東へ行き、香港から帰国し、翌日から東京シンポの準備に入りました。

東京から参加したメンバーは、坂野正高さん、衛藤藩吉さん、田中正俊さん、山根幸夫さん、野沢豊さん、藤井昇三さん、そして久保田の7人でした。京都等からのメンバーは、小野信爾さん、狭間直樹さん、松本英紀さん、石田米子さんでした。当時はまだ団体旅行の形式をとり、坂野さんが団長、衛藤さんが副団長、私が秘書長を務めました。ただ、団長の坂野さんは夜が早い人で、夜の会合や宴会には顔を出されない。勢い副団長の衛藤さんが団長代理のようになりました。私が秘書長をやるようになったのは、東京にも京都にも顔が利く(?)ということで田中さんが推薦したからだと思います。

参加者の決定についても、実は舞台裏ではいくつかの事情がありました。最近、劉大年さんが安藤さんや佐伯さんに宛てた手紙のコピーが出てきました。それを見ると、藤井さんと久保田の参加は早くから決定していたようです。それから、安藤さんと佐伯さん、市古宙三さんの名前も最初からありました。しかしどういうわけか、正式の招待状には市古さんの名前がありませんでした。その代わり、東京側からあと2人参加してもよろしい、という申し出がありました。それで、田中さんの後押しで野沢さんと市古さんの参加が決まりました。ところが市古さんは、このときは参加を見合わせる意向でした。結果的に後から行くことになりましたが、アジア・フォード財団の件で色々あった人たちと行くのはさすがに抵抗があったかも知れません。

後で聞くと、文革反対であった野沢さんの参加

にも一部で不満が出たようです。ただ、向こうで京都の小野さんや狭間さんと一緒に話をしたとき、野沢さんが来ない辛亥シンポなんて意味がない、という考えを聞かせてくれましたから、私も胸をなで下ろしました。

それから、北京から武漢へ行く飛行機でのことをお話しておきます。私は狭間さんと隣り合わせで座りましたが、前の席に座っていた胡繩（孫中山研究学会会長）さんが手帳を広げていました。何が書いてあるのかとこっそり覗いてみたら、日本人の参加者の名前が書いてある。「野沢豊」のところには、「修正主義者」と書いてありました。それで狭間さんと2人で「いや、見なかったことにしよう」と（笑）。けれども、胡繩さんは明朗豪快、面白い、率直な方で、後になって野沢さんとは非常に親密になりました。

後に胡繩さんが社会科学院院長の資格で来日したとき、野沢さんが中心になって青年中国史家会議を開きました。そこでオフレコの談話会がありました。私も使い走りをしていたので、参加してもいいことになりました。聞きに行ったところ、非常に率直なことを話されるんです。「われわれは解放前には、革命が成功しさえすれば、貧困や売春の問題はたちどころに解決できると思っていた。しかるに、解放後も貧困はすぐにはなくならない。まだまだ大変な問題である。スリとかかっぱらいのような犯罪も、売春もまだなくなるしない」ということを話されました。

さて、「修正主義者」と書かれた野沢さんでしたが、中国側はそれをおくびにも出さない。それどころか、野沢さんを非常に立てて歓待しました。劉大年さんは「東京でお世話になったお返しだ」とばかりにホスピタリティーを発揮されて、他国人からえこひいきと思われまいかと心配になるくらいでした。野沢さんはこの時の歓待に感激されて、心底から中国の学者と付き合うようになりしました。そういうこともあって、私財を出して『近

きに在りて』を創刊したわけです。

81年は野沢さんだけでなく、日本の中国近代史研究、日中の学術交流にとっても大きな転機でした。これに及ぶような契機はないだろうと思います。これ以降、毎年のように日本と中国の学者が集まり、孫文・辛亥革命がらみの学会が開かれるようになります。

Q：1991年のハワイでの「孫文と中国革命」シンポジウムについて、関連することがあればお聞かせください。

91年のときも、ハロルド・シフリンさんと衛藤藩吉さんがコンビを組んで英語の論文集〔*China's Republican Revolution*, edited by Etō Shinkichi and Harold Z. Schiffrin, Tokyo: University of Tokyo Press, 1994.〕を出版しました。ハワイ会議の時も衛藤さん、シフリンさんが中心でしたが、山田辰雄さん、中村哲夫さんが企画運営の面で大活躍されました。当時の私自身のバイアスで受け入れられない部分もありましたが、私はシフリンさんの研究を非常に高く評価していました。そのときは参加者全員が英語で報告したのですが、論文化するに当たってシフリンさんが校正を一手に引き受けてくれました。しかも校正だけでなく、意見も細かく言ってくれるんですよ。当時は国際電話があっても私は英語が話せないので、レタックスを使ってやり取りしました。本当に懇切丁寧に見てくれて、激励までしてくれるもんですから、すっかりシフリンびいきになりました。

このころには、中台の研究者も普通に会えるようになっていました。すでに82年のアメリカでのシンポのときに初めて会った者同士だと、もちろん論争はしますが、顔を合わせれば「やあ」「やあ」というようなものでした。私と林明德さん、黄福慶さん、黄自進さん等台湾の研究者との付き合いも、80、90年代以降深まっていきました。ただ藤井昇三さんの孫文と日本との密約に関する研究に

対して、台湾の国民党党史委員会の陳鵬仁さんなどの批判が激烈なのにはびっくりしました。

こういうわけで、79年には劉大年さんや章開沅さんのような大御所クラスに出会いました。これがご縁となって、81年の東京・武漢シンポでは横綱・大関クラスと知り合い、それから後は段々と裾野が広がっていきました。91年頃には大学院生クラスとも知り合うようになりました。天安門事件の知らせに悲憤慷慨して帰国した留学生が、次の学会で会ったときにはすっかりブルジョワ的の格好になっていた、なんていうこともありました。テーマの選び方も欧米の心理学やアナル学派の手法を取り入れたりして、当時の歴史学研究会のオーソドックスな研究方法よりもずっと柔軟でした。こりゃあ、中国共産党が危機感を持つはずだなと思いました。「欧風美雨」の傾向は今日まで続いているようです。(待续)

[注]

- (1)東洋文庫近代中国研究班編『近代中国研究与市古宙三』汲古書院、2016年も参照。
- (2)「辛亥革命と国際関係」に関する東京国際学術会議趣意書」久保田文次氏提供。
- (3)『日本経済新聞』1981年10月22日（久保田文次氏提供）。